



司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでもらいたい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、中島貴幸神父(オプス・デイ属人区)が担当。



中島貴幸神父から
この二冊



『道』(新装改訂版)(聖ホセマリア・エスクリバー著、新田壮一郎訳、教友社、2021年、税込1300円)

キリスト者にとって、日々の祈りは心の呼吸のようなもの。では、どのように祈れば良いのでしょうか? 念祷を始めることをお勧めします。毎日、時間を決めて、神様と二人きりで語り合うひと時を持つのです。でも、何について語り合うのでしょうか? 念祷を始めた人が最初に経験する困難は、考えることがなくなつて退屈に感じること。そこで、念祷の手引きとして、『道』を推薦します。

「どう祈ればいいのか分からないというのか。神の御前に身を置きなさい。そして、『主よ、祈り方が分かりません』と申し上げ始めた瞬間に、確実にあなたは祈り始めているのである」(道九〇)。

難しく考えず、本書の短い考察の中から、関心のあつたものを選びながら読み、そして、神様と語り合ひましょう。きつとあなたの祈りに刺激を与えてくれると同時に、生き方を根本から見つめ直すヒントを見つけられることでしょう。



『世界は善に満ちている』トマス・アクイナス哲学講義(山本芳久著、新潮社、2021年、税込1760円)

多くの若者に読んで欲しい一冊は、『世界は善に満ちている』です。著者の山本芳久先生は、東京大学で聖トマス・アクイナスの『神学大全』を教えるカトリック信徒です。

著者自身が語っています。「二冊の書物を読んで人生が変わる。本当にそんなことがあるだろうか。(…)筆者にとって最も決定的であったのは、中世ヨーロッパの哲学者トマス・アクイナスの『神学大全』との出会いだ。20歳のときにこの書物に出会わなかったならば、筆者の人生観や世界観は全く異なるものになつていただろうし、哲学研究者という職業を選んでもしていなかったかもしれない」。

本書の簡潔にして鋭い解説は見事です。聖トマスの感情論について、学生との対話という形式で進められる丁寧な説明は、読み進めるだけで、自己の感情を見つめ直すことにつながります。その上、哲学をする楽しみさえも教えてくれると思います。そして、タイトルにある『世界は善に満ちている』を納得するとき、世界に対する見方も、大きく変わることでしょう。



次回は、高橋聡神父様(明石教会)です。

若者の読書感想文募集

- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者、もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
- ② 感想は4000字程度。氏名、所属、顔写真(自由)を添えてメール(jiho@osaka.catholic.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
- ③ 感想を送ってください。た方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。たくさんのご投稿をお待ちしています。



ラジオ
信仰の時間

聖霊降臨のビッグバン

ジョヴァンニ・デア神父
(尼崎教会主任、6月5日放送分)

「聖霊降臨」はクリスマスと復活祭に次いで、三番目に大きいキリスト教のお祝いですが、一般の人にはあまり知られていません。父と子と違って、聖霊をイメージすることは少し難しいからかもしれません。聖書には聖霊を表すために3つのイメージが出てきます。「飛ぶ鳩」と「燃える火」と「風」です。これら3つはどうしても抽象的になりやすいものです。しかしこの説明では、聖霊降臨がよく知られていない理由として、あまり納得できないかもしれません。

聖霊降臨は私たちキリスト者にとって大切なお祝いです。クリスマスは可愛らしくロマンチックなお祝い、復活祭は大きな苦しみを乗り越える喜びの祝いです。そして、聖霊降臨はイエスの弟子が歩み出すためのお祝いです。

クリスマスと復活祭は、御父がイエスを通してどのように救いの計画を実現したかを表します。聖霊降臨は、どのように聖霊が降り、イエスの弟子が歩んだかを教えてくれます。そして同じように行動するには私たちはどうすればいいのかを考えさせてくれます。

しかし私たちはなぜ、すぐに行動できないのでしょうか? 2つのコンプレックスがその理由として考えられます。一つは「怠惰」です。これは聖書の中で一番古いものです。

神様は天地を創造した時、御自分の似姿として人間を造りました。アダムとイヴです。神様は2人に何でもお与えになり、素敵なエデンの園に住ませました。園のどの木からも取って食べることを許しましたが、エデンの真ん中にある善悪を知る木から食べることは禁じます。アダムとイヴは約束を守り、幸々に暮らしていました。しかしある日、イヴは禁止された木の実を食べるように蛇から誘惑を受けます。誘惑の言葉は「それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となる」でした(創世記3・5参照)。つまり、働くことも努力することもせずに、一瞬で神様のようになれるという誘惑です。人間はいつも、怠けたいという気持ちをどこかに持っています。アダムとイヴのように、木の実を食べるだけで結果を得たいと思ってしまうのです。反対に、聖霊は私たちに働き続けることを勧めています。そして、どんなことであっても実現するためには、忍耐が必要だとも言っています。魔法の杖はどこにもありません。たまに頑張るのではなく、行動し続けることで実現へと近づくのです。

二つ目は「社会の基準」というコンプレックスです。一例をあげます。1958年に教皇ピオ12世が亡くなってから、カトリック教会は新しい教皇を選出するのに時間がかかりました。二人の有力候補者から、一人に絞ることがどうしてもできなかったのです。最終的には他の者を教皇として選び、次の機会に有力候補者から選ぶつもりだったそうです。この時そのようにして選ばれたのが、教皇ヨハネ23世でした。周りの人は、ヨハネ23世が何か新しいことをする人とは思っていませんでした。これまでどおり教会を維持していくのだからと思っていました。しかし、後に第2バチカン公会議を始めたのはヨハネ23世でした。社会の基準という立ち位置から見れば、高齢だった教皇は何も大きなことはし

ないだろうと思われていました。しかし彼は結果的に、二千年のカトリック教会の歴史の中で最大の変革を実現しました。

聖霊の働きは、社会の動向や基準と全くちがいます。社会の基準からは「何もできない」「何もしない」と考えられている人を通して大きな感動が実現します。聖霊はいつも、私たちの思いがけないところで働いています。今でも隠れたところ、見えないところで世界の中で神の国を実現しようとしています。私たちは神に従えば、大天使ガブリエルがマリア様に告げた通り「神にできないことは何一つない」ことを実感できるでしょう。

最後にもう一つのイメージをお伝えします。聖霊降臨はビッグバンのようなものです。その日から教会の上に聖霊の贈り物が与えられました。そして聖霊を通して、私たちは自分のコンプレックスを乗り越えることができます。その聖霊の注ぎは止まることなく、ずっと続いています。

福音によると、聖霊の働きの一つは「信者の未来への原動力」です。ですから私たちは、キリスト者として恐れることなく、こころを開いて聖霊の働きに従えば、想像できないぐらいの素晴らしいことができます。聖霊の自由な働きをいつも祈り求めましょう。



毎週日曜日 5:50~6:00AM 放送
8月担当: 菅周永 神父
ABCラジオ(朝日放送) AM1008/FM93.3
スマホアプリのradikoでも聴けます。